ALTスタンプラリー
～福井県内の小学校における英語教育とALT活用の可能性～

福井県立武生高等学校　河野光希　小山澄馬　馬上免瑞季　山本和奏

Abstract

With the introduction of compulsory English education in elementary schools in 2020, the number of students who dislike English has been on the rise. Our preliminary research suggested that this trend may be due to an overemphasis on academic correctness in lessons. We hypothesized that increasing interactions with ALTs (Assistant Language Teachers) could help students develop a more positive attitude toward English. Although Fukui Prefecture has the highest number of ALTs per student in Japan, opportunities for student-ALT interaction remain limited. To address this, we planned and implemented an “ALT Stamp Rally” to encourage casual and enjoyable communication between students and ALTs. By analyzing the results of pre- and post-activity questionnaires, we found that students who spent more time interacting with ALTs were more likely to enjoy learning and using English.

1　はじめに

2020年度の学習指導要領の改定により、小学校での英語教育が必修化された。本研究では、福井県内の小学校における英語教育の現状と課題、及び英語に対する児童の意識を調査し、児童の学習意欲向上を目的とした効果的な方策を検討した。

2　動機：英語嫌いの小学生の増加

小学校の英語必修化に伴い、小学3・4年生では話すことと聞くことに重点を置いた外国語活動が、小学5・6年生ではそこに読むことと書くことを加えた外国語の授業が行われている。文部科学省の全国学力状況調査によると、小学６年生で「英語の勉強は好きですか」という質問に対して「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」と答えた児童は、2013年度の23.7％に対し、2021年度は31.5％と7.8ポイント増加している。つまり、英語が必修化されたことにより、英語に苦手意識をもつ児童が増加し、児童の間で英語への意識が二極化していると考えられる。

また、福井県の状況について、必修化の前後で児童の意識変化を示す直接的なデータは得られなかったが、小学校英語必修化に関する県内の調査によれば、英語が好きと答えた児童の割合は小学3年生で92％と非常に高いものの、6年生になると76％にまで減少していることが分かった（令和5年度）。私たちは、小学校英語の必修化によって中学生レベルの文法や単語の習得が求められるようになったこと、および高学年から始まるテストにおいて文法や単語の正確さが評価対象となることが、小学生の英語に対する苦手意識につながっていると分析している。

英語学習は初期段階でのつまずきがその後の学習意欲に大きく関与するため、児童が英語を楽しみながら学習できる環境を整備することが求められる。そこで私たちは、小学生が英語を楽しく学べるようにすることで、福井県内の児童における英語嫌いを改善することを目的として研究を進めることにした。

3　問いとその背景

（1）問い

どうすれば福井県内の小学校でALTと児童との交流を増やすことができるか

（2）問いの背景

小学校英語教育について研究を進めるにあたって、私達はALT（外国語指導助手）に着目した。その背景として福井県は児童10万人あたりのALTの数が日本一多い。そういった環境を活用することで福井県ならではの取り組みができると考えたからである。

現在、小学校の英語の授業は主に中高の英語の教員免許を持つ専科教師と免許を持たない担任教師によって実施されている。先行研究によれば、担任教師は児童との信頼関係が強く、寄り添った指導を行うことができるものの、英語力が十分でなく、授業が教科書に沿った形式的なものになりがちである。一方で、専科教師は専門的な知識を有し、英語を楽しめる授業を提供できるが、その数が不足しているという課題がある。この課題に対して、ALTは正しい英語を教えることができるネイティブスピーカーとして教科書にこだわらない授業ができる点で、専科教師と担任教師の長所を兼ね備えた中間層的な立場として、活用できるのではないかと考えた。

しかし県内のALTの活用にはいくつか課題があることも明らかになった。

①市町による雇用形態の格差

以下に示すのは各市役所と町役場にインタビューをして調査した福井県内のALT活用状況である。

表1　福井県内の各市町のALT活用状況

市	ALT人数	児童数/ALT	小学校/ALT	5,6年(頻度)	3,4年(頻度)
A市	16	778	3.3	週１	２週間に１回
B市	2	1587	5.5	週１	２週間に1回
C市	3	471	3	週６	-
D市	3	445	3	週５	週５
E市	2	478	5	全て	全部
F市	5	743	2.4	週１	２週間に１回
G市	2	584	5	ほぼ全て	ほぼ全て
H市	2	584	5	ほぼ全て	ほぼ全て
I市	3	1313	5.7	月1	月１
J市	1	69	1	月１	月１
K市	1	428	4	週１	週１
L市	5	176	1.6	週１	２週間に１回
M市	2	183	1.5	ほぼ全て	ほぼ全て
N市	3	152	1.7	全て	全て
O市	2	206	2	全て	全て
P市	2	331	4.5	週１	２週間に１回

福井県内では県の管轄である中学・高校には各学校につき原則一人のALTが県から派遣されている。一方小学校は各市町の管轄となっており、市町によってALT一人あたりの小学校数やALTの来校頻度などに大きな差がある事が分かった。

②ALTと児童との授業外での交流の不足

ALTの人数は全国屈指の多さであるにもかかわらず、文部科学省の英語教育実施状況調査（令和4年度）によると、「英語の授業以外の授業や学校行事での児童との交流」にALTが参画した学校の割合は46.2%、「一定の目的を持った授業外での教育活動（例：クラブ・委員会,希望する児童に対する個別指導,異文化理解のための学習）にALTが参画した学校の割合」は20.1%となっており、これらは全国平均と比べてみても低いことが分かった。つまり児童とALTとの交流が十分に行われておらず、ALTが多いという強みを活かしきれていない。

そこで①と②の課題を踏まえて、①市町のALTの雇用形態の差を私達が是正することは現実的には難しいと考え、今回は②ALTと児童との授業外での交流の拡大に絞って研究を進めた。

4　調査

ALTと児童との交流を拡大する方法を考えるために、実際に県内の小学校での現状を調査した。

(1) 小学生へのアンケート

対象：越前市、鯖江市の小学3～6年生
699人

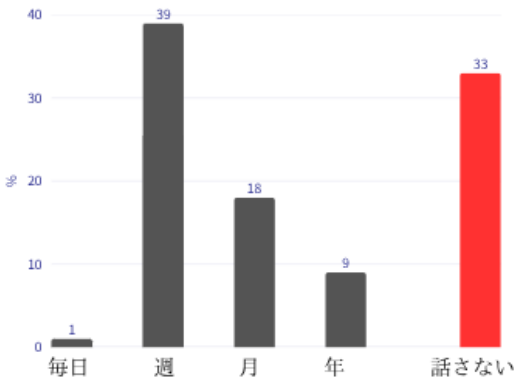
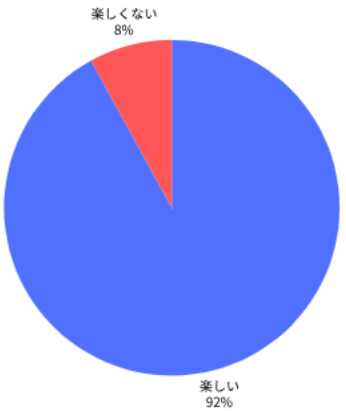


図1.授業外でALTとどれくらい話すか

得意:43%　苦手:57%
図2.英語は得意か



楽しい:92%　楽しくない:8%
図3.ALTと話すのは楽しいか

図1に示されているとおり、授業以外でALT（外国語指導助手）と全く話さないと回答した児童は全体の33%にのぼった。

一方で、図2、図3からは英語に苦手意識を感じている小学生が多いものの、ALTとの交流を「楽しい」と感じている割合は高いことが明らかとなった。これらの結果から、英語の得意・不得意に関わらず、児童はALTとの交流を楽しんでいることが伺える。

(2)県内小学校で働くALTへインタビュー
(2024.11.08)

県内の鯖江市などの小学校にALTを派遣している団体に依頼し、オンラインでインタビューを行った。そこで分かったことを以下に示す。

Q1：放課後や昼休みなどに空いている時間はあるか。
A：日ごとに異なる学校に行っており忙しい。ただし授業の間の休み時間などは空いている。

Q2：時間に余裕がある時に子どもたちと関わりたいと思うか。
A：子どもたちと関わりたい！休み時間に時間はあるものの自分からは話しかけに行きにくい。子どもたちも誘ってくれない。

このインタビューから、ALTも子どもたちとの交流を望んでいることが分かった。つまり、児童とALTの双方が交流に対し意欲を示してはいるものの、なかなか交流の機会が取れていないことが課題として浮き彫りになった。この課題に対して専科教師の方にも意見をお伺いした。

(3)県内小学校で働く専科教師へのインタビュー　(2024.11.12)

ALTと同様にオンラインでインタビューを行った。

Q1：日本人教師から見てALTと児童の交流の様子はどうか
A：一度6年生が修学旅行だった日に5年生とALTが一緒に遊ぶ機会があり、そこでは様々なアクティビティを通してALTと児童はとても楽しそうに交流していた。しかし、普段は専科教師が児童とALTの間に入って通訳をすれば双方が楽しそうに交流しているが、専科教師がいないと自分からALTのところへ行く児童は少ない。また、ALTの方も授業が終わったらすぐに職員室に帰ってしまったり、昼休みも体育館に遊びに来てくれる人と来てくれない人がおり、両者の交流の場が少ない。その一番の理由は言語のハードルである。児童は正しい英語でないと話に行けないという意識があり、それが交流の妨げになっている。そのため、正しい英語でなくとも友達のような感覚で話に行けるようなきっかけが必要だ。

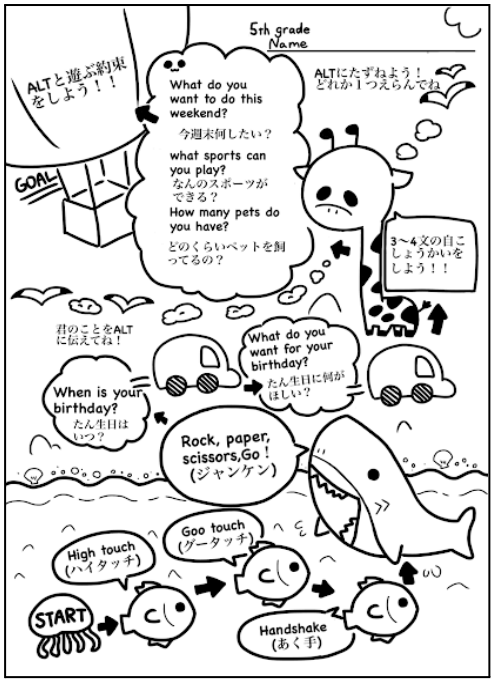
これらの三者のインタビューから、私達は日本人教師を通さなくてもALTと児童だけで仲良く交流できるようになることが目標だと感じ、双方の交流のきっかけとなるアクティビティを考えて交流のハードルを下げようという考えに至った。

5　検証：ALTスタンプラリー

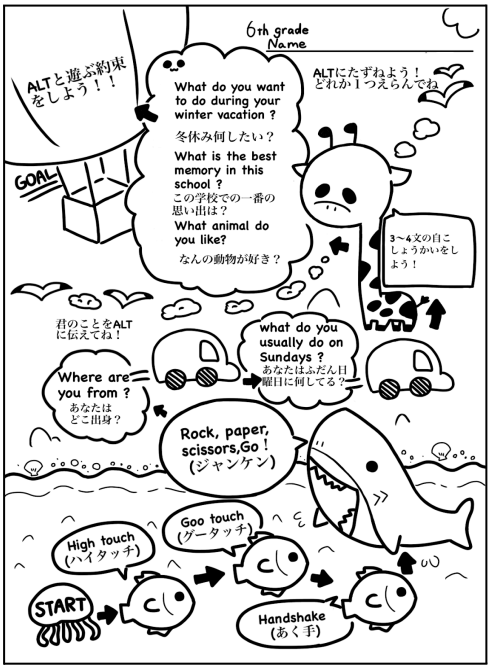
（1）実施内容

私達はALTと日本人教師にアドバイスを頂きながら、児童とALTとの交流を促進する具体的な手段として、「ALTスタンプラリー」を考案した。本企画は、児童がALTとの会話や活動を通してスタンプラリーを進め、すべてのミッションを達成することを目指すものである。英語の正確さを求めるのではなく、「英語を使って伝える楽しさ」を体験させることを目的としている。作成にあたっては、ALTや英語専科教員と何度も協議を重ね、以下のような工夫を加えながら、児童全体が参加しやすい内容を目指した。

【工夫】
・英語を読む、書く活動ではなく話す活動に重点を置くこと
・レベルを設定し、徐々に難易度を上げることで英語が得意な子も苦手な子も楽しめるようにすること
・後半の難しいミッションは選択式にして、児童がやりやすい「お題」を選べるようにすること
・教科書で扱われている構文も用いることで学んだことを実践できるようにすること
・ALTに児童が質問するミッションも用意し、双方のコミュニケーションを促すこと
・すべての英語に日本語訳を併記すること
【ミッションシート】
下は、左に5年生用、右に6年生用の実際に小学生に配って取り組んでもらったミッションシートを示している。



（↑5年生）



（↑6年生）

図4　スタンプラリーのミッションシート

【内容】

ミッションは３つのレベル（海、陸、空）に分かれており、それぞれの目的と内容は以下の通りである。

レベル1：非言語的コミュニケーションによる交流

英語に苦手意識のある児童でもまずは気楽に企画に参加できるよう、身体的なやりとりを中心に構成した。具体的な活動は以下の4つである。

・ハイタッチ
・グータッチ
・握手
・じゃんけん

レベル2：教科書に基づいた基本的な英会話

教科書ですでに学習している簡単な英語を使ってALTと会話するミッションを設定した。

【5年生】
・When is your birthday?
（誕生日はいつ？）
・What do you want for your birthday?
（誕生日に何がほしい？）

【6年生】
・Where are you from?
（あなたはどこ出身？）
・What do you usually do on Sundays?
（普段日曜日に何している？）

さらに、5・6年共通で3～4文程度の自己紹介を行う課題も含め、文法の正確さよりも英語でALTと会話をすることに対する児童の言語や心理的ハードルを下げることを目指した。

レベル3：交流の継続を促す対話活動

教科書で学んだより複雑な構文を用いてALTに質問をし、対話を深めるミッションを設定した。児童は次の中から1つを選び、ALTに英語で尋ねた。

【5年生】
・What do you want to do this weekend?
（今週末、何をしたい？）
・What sports can you play?
（どんなスポーツができる？）
・How many pets do you have?
（どのくらいペットを飼っている？）

【6年生】
・What do you want to do during your vacation?（休みに何をしたい？）
・What is the best memory in this school?　（学校での一番の思い出は？）
・What animal do you like?
（どんな動物が好き？）

また、企画が終わった後も児童とALTとの交流が続くように「ALTと遊ぶ約束をする」というミッションを設けた。

【その他】
　児童の参加意欲を高めるための工夫として、以下のような景品を作成した。各レベルに応じて景品を設定し、クリアした児童から（レベル1：シール、レベル2、3：しおりやアクリルプレート）とした。また景品にはイラストと英単語を併記し、視覚的に英語の語彙に親しめるようにした。下に景品として配った栞を示す。

図5　景品A～H

図6　景品I～P

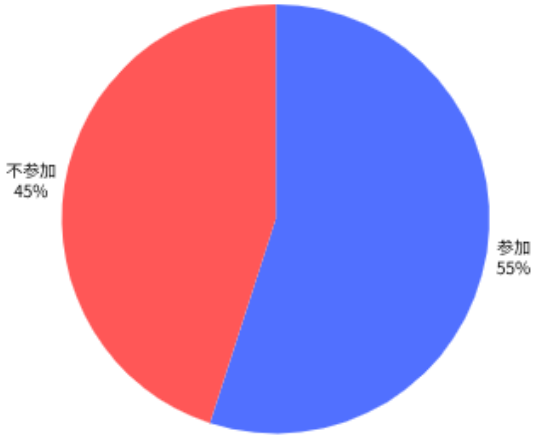
図7　景品Q～Z

（2）実施1：A小学校

　県内の某小学校（以下A小学校）に協力を依頼し、11月18日から12月12日の三週間、ALTが来校する木曜日にALTスタンプラリーを実施してもらった。また、対象は小学3年生から6先生全員だと多すぎて混み合ってしまうとのことだったため5年生と6年生だけを対象とした（199人）。さらに、5・6年生になってテストが行われることで苦手意識を感じるようになってしまった児童に楽しみながら英語に親しんでもらいたいと思ったからである。

　次に企画の効果を示す。検証期間中に実際に小学校にお邪魔して授業や休み時間の様子を見学させて頂いた。すると、授業前の休み時間にALTを囲んで児童とALTがたくさん話している様子が見受けられた。また授業が終わると同時に多くの児童が再びALTのもとへ話しかけに行っており、ALTと児童の交流のハードルを下げることができたといえる。また、数名の児童、ALT、専科の日本人教員にインタビューを行った。感想は好評で、日本人教員は、企画のお陰でALTが授業後に長く教室にとどまってくれるようになり、児童が話に行くチャンスが増えた、ALTは休み時間だけでなく授業中の活動にも児童が活発になった、児童は景品がもらえて嬉しかった、と話していた。

　しかし、A小学校での検証では課題も多かった。以下に企画に参加した児童の割合を示している。



参加:55%　不参加：49%
図8　A小学校のスタンプラリー参加率

上記のグラフから児童の参加率は55%と低かったことが分かった。原因として、以下の課題が考えられる。
・実施時期が学期末と重なり、ALTとのスピーキングテスト等の予定が集中していた
・児童が休み時間にALTのもとを訪れる時間的余裕がなかった
・検証期間が短く、加えて学期末特有の行事やテストによって児童の負担が増大していた
・実施期間が3週間（週に3回）と短く、活動に慣れる前に終了した

特に、「自由に交流できる時間の不足」と「学期末の多忙さ」が主な要因と考えられる。企画自体への関心は一定数確認できたが、学校全体の余裕のなさが参加率低下につながったと推察される。

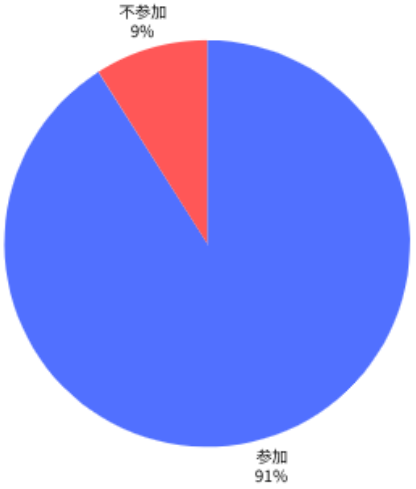
よって、以下の点に留意する必要がある。
・比較的余裕のある時期を選定すること
・実施期間を十分に確保すること
・他行事やテストとの時期的重複を避けること

そこで児童の参加意欲を高め、自然な交流機会を創出するために上記の点を改善し、県内の別の小学校（以下B小学校）で再び検証を行った。

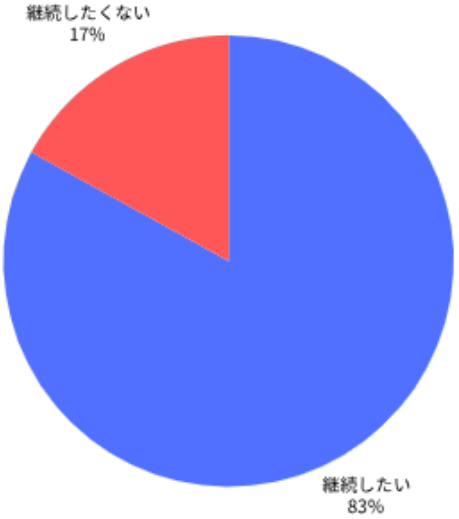
（2）実施2：B小学校

A小学校での課題を踏まえ、B小学校では以下のように改善した。
・実施時期を、児童が比較的余裕をもって過ごせる時期に設定した
・ALTのもとへ行く児童が混み合わないよう、A小学校よりも若干児童数が少ない学校で実施した
・景品が好評だったことから、前回は配らなかったレベル1を達成した児童にもシールを配布することで、より多くの児童が気軽に参加できる仕組みとした

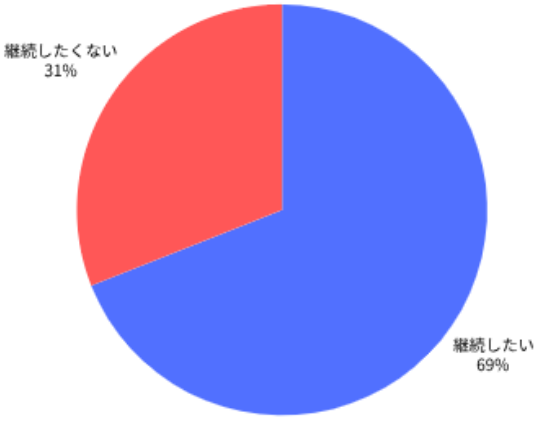
これらを改善し、企画の前後で行ったB校のアンケートの結果を下にグラフで示す。



参加:91%　　不参加:9%
図9　B小学校のスタンプラリー参加率



継続したい:83%　継続したくない:17%
図10　「ALTとの会話に対する不安が減た」と回答した児童の割合



継続したい:69%　継続したくない:31%
図11　「今後もALTと会話を継続したい」と回答した児童の割合

・スタンプラリーの参加率は91%に上昇した。（図９参照）
・「ALTとの会話に対する不安が減少した」と回答した児童は83%に達した。（図10参照）
・「今後もALTと会話を継続したい」と回答した児童は69%であった。（図11参照）

以上の結果から、以下の要素が、児童の英語学習に対する意欲向上およびALTとの交流促進において有効であることが示唆された。

・実施時期の適切な設定
・ALTと児童の人数比の適正化
・景品配布方法の工夫による参加ハードルの低減
・実施期間の十分な確保

6　結論

福井県内の小学校においてALTと児童との交流を促進するためには、まず児童がALTに対して感じている心理的ハードルを下げることが不可欠である。
児童はALTとの交流を通して、英語を正しく使うことへの過度な不安から解放され、楽しみながら自然に英語に親しむことができる。その結果、英語に対する苦手意識の克服、学習意欲の向上、さらには英語力そのものの向上へとつながると考える。しかし、現在は言語の壁や接点不足により、児童とALT双方が交流を望みながらも機会を十分に持てていないのが現状である。

この課題に対する具体的な手段として、我々は「ALTスタンプラリー」の導入を提案する。
スタンプラリー形式にすることで、児童がALTに話しかける明確な目的ができ、交流への心理的ハードルを大きく下げることができる。さらに、非言語的なコミュニケーションから段階的に英語を用いた交流へと発展させる設計により、英語への自信を自然に育むことができる。
実施にあたっては、活動時期を児童が比較的余裕を持てる期間に設定し、実施期間を十分に確保することで、より多くの児童の参加を促す必要がある。

以上より、ALTとの交流機会を意図的に創出し、児童が主体的に英語に触れる環境を整備することが、英語嫌いの克服と学力向上に資するものと考える。

7　まとめ

本研究では、「福井県内の小学校でALTと児童との交流を増やすにはどうすればよいか」という問いに対し、児童とALTとの交流のハードルを下げることが必要不可欠であるという結論に至った。福井県は全国屈指の学力を誇る一方で、都会と比べると塾などの学校外での学習機会は少ないと言える。そこで小学校での義務教育という皆に平等に与えられた環境の中で英語学習の効果をより高いものにすることが求められる。その第一歩として私達は小学生に英語の楽しみを感じてほしいと考える。その中でALTをより効果的に活用することは福井県ならではの取り組みであり、交流の機会を増やすことで、児童は英語への苦手意識を克服し、学習意欲や英語力の向上が期待できる。その具体的な手段として、本研究では「ALTスタンプラリー」を提案する。

8　参考文献

・令和4年度英語教育実施状況調査 ．「【都道府県別】ALT参画人数（小中高）及び小学校」文部科学省
・北海道教育大学 萬谷隆一（2019)「北海道教小学校英語における担任教師・専科教師についての教師の意識調査」北海道教育大学学術リポジトリ
・萬谷 隆一（2021）「英語における望ましい指導者についての意見と関連要因についての調査」小学校英語教育学会誌　J-STAGE https://doi.org/10.20597/jesjournal.21.01_70 /2024年6月26日
・福井県教育総合研究所　教科研究センター小中学校教科研究課　木村哲彦（2021）「福井県における英語教育の強み－県外派遣教員から見た福井県の英語教育－」fukui-c.ed.jp/https://www.fukui-c.ed.jp › uploads › 2021/12 /2024年9月18日

9　謝辞

本研究を行うにあたり、多くの方々にご協力いただいた。

本研究を遂行するにあたり情報を提供してくださった福井県義務教育課の皆様、お忙しい中何度も相談に乗ってくださった先生方、授業見学やALTスタンプラリーの実施にご協力頂いた小学校関係の皆様に厚く御礼申し上げる。